

秋山和慶

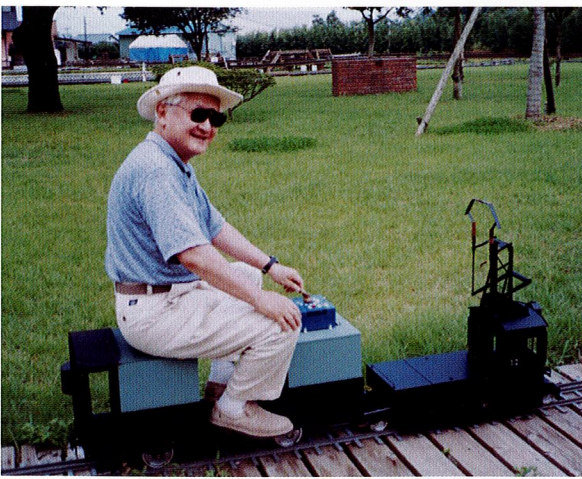
人生は各駅停車で

第4回

鉄道模型への愛



バンクーバーの自宅の鉄道部屋にある、自慢のジオラマ。



裾野市で、秋山さんお手製のミニ機関車を運転中。

鉄道ファンの僕は鉄道模型も好きで、仕事の合間に作っています。鉄道模型はキットを作るものもあれば、スクラッチビルドといって「からすべて自分で作るものもあります。『から作る』というのは、図面も自分で書くんですよ。雑誌や本に設計図が載っているの、そこから80分の1や150分の1という本物通りの縮尺にして図面を書きま

す。その図面を最初から自分で書くのもおもしろいんですよ。そして買ってきた真鍮板を切り刻み、糸鋸で窓を開けたり、ハンダ付けしたり。それをやるための機材がカナダの家にも東京の家にもあります。本当に好きな人は旋盤、ボール盤、フライス盤など、まるで鉄工所のような設備を家に揃えています。まるで町工場ですよ。

車両ひとつ作るのにかかる時間は、物にもよりますが、根を詰めて作れば1週間でできるものもあれば、今僕が作っている機関車なんて5年かかってやっと車両の下回りができたくらいで

す。模型店の店主には「死ぬまでにできるかな」なんて笑われていますけれど、でも、早く完成させることよりも、こつこつと自分の手を動かして作ることもそのものが楽しいんです。

音楽家にも模型仲間がたくさんいますよ。読売日響のファゴットの吉田将君は筋金入りの鉄道模型好きですし、コンサートマスターの藤原浜雄君もそうです。我が家にはちよつとしたスペースがあるので、みんなで集まって線路を敷いて模型を並べながら、「今度また新しいキットが出たぞ」なんて模型の新しい話の話をしたりしています。京都市響にも模型好きが多いですね。キットで作ったものに細かい部品を取り付ける「ディテールアップ」の名人がチューバの武貞茂夫君です。ほかには模型用にマンションを借りている人もいますし。

最近では店内にジオラマがあつて自分の模型を走らせることができる飲食店が多くありますが、京都にも大きな店があるので、京都市響に行つたとき

は楽団員と飲んだり食べたりしながら模型を走らせています。

屋外で模型を走らせる気分も格別です。静岡の裾野市に会員制で鉄道模型を走らせる場所があつて、会員は自分の好きなきにいつでも自分の模型で遊べます。僕は今のところバッテリーですが、何人かは蒸気機関車を走らせていて、「乗っていいよ」なんて声をかけてくれたり。ここには会社の社長さんもいたり、本物の機関士もいたり、いろいろな人がいますが、みんなに共通するのは、鉄道模型を愛する心。職業も肩書きも関係ありません。そんな場での鉄道模型談義は楽しくて、心が熱くなります。



©川村悦生

秋山和慶

1941年生まれ。64年2月に東京交響楽団を指揮してデビューのち音楽監督・常任指揮者を40年間務める。東京交響楽団桂冠指揮者、ミューザ川崎シンフォニーホール・チーフアドバイザー。